
田中。

坂春超丸十四五衛乃助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

田中。

【Nコード】

N9344C

【作者名】

坂春超丸十四五衛乃助

【あらすじ】

高校生が出会ったのは超靈感少年。少年達のビックリ仰天不思議物語。

第一話 紙切れ（前書き）

若さへの挑戦を。

第一話 紙切れ

『僕は……人には言えない 恋をした』

そんな一言だけが書かれた紙切れが机に入っていたのは今日の朝。だから朝からコレが気になって仕様が無い。

そしてソレはバイト先にまでズカズカと入り込んで来た。

「人には言えない恋……」

バイトの休憩時間、もの凄く小さな声で呟き、頭を捻っていた。

—— 解らない…… 何かの意図があったり？ 一番の疑問は何故俺の机？——！。

「んー 解らない」

考え込んでどれくらいたっただろう。

気が付いたときには、深い夢の中。誘われるままに誘惑の手招きに連れていかれた。

風が吹く。生暖かい風。その風は、やがて小さく渦を巻き、息を持ったように暴れ狂う。

—— ほお…… 粹だなー俺は 今空を飛んでるぜこんな感じが……。

あまり感じた事の無い不思議な感覚だ。渦を巻いた風は、背中を押し上げる。上昇する風は次第に強くなり、上へ行くに攣れ雪の様に冷たくなり、体に無数のイボを作る。

—— ……鳥肌……。

たが意外にも寒さは感じない。夢だからだろうか？気持ちは落ち着いていたが、仕事をしている意識が無いところを見ると、思考は完全にストップが掛けられ現実から離れていた。

次第に風力は強くなり、舞い上がった風は砂埃りを連れて舞い上がる。条件反射で顔を庇うように目を閉じ、顔を抱え込むように両腕を組む。

だから目を離したのは一瞬だった。

風が止み、目を開ける準備が整ったと言いたげな静けさが、辺りを襲う。薄く目を開けた。

頭が少し混乱しているのか、気のせいだと、目を擦ってはパチパチを繰り返してみたが、気のせいでは無い、と気付くのに時間は掛からなかった。

……?!?!?……

視界に広がる光景に思わず言葉を失った。生まれてから歩んだ人生はたったの十六年、初めて絶句と言う言葉の意味を理解した。

——そりゃあ 一度は来たいと誰もが思うケド… 実際……引くなあ……。

馬が空を飛び、龍は地を這い、雲の上に動物が乗り、その動物は深く腰を掛けている、その手にはシャボン玉の液体的なモノが入った容器、そして申し訳程度に作られた細長いシャボン玉棒、そこに小さく息を吹き掛けると虹色に輝く風船、では無く何種類もの色をしたお花。雨の様に降り積もるお花は、木の葉、草の葉に幾つもの種を撒き花を作る。

花が出来た道は大きな花畑となっていく。

――コレが……世に聞くメルヘン……世界中の女の子を虜にするメルヘン……――。

夢の入口か、地獄の入口か？

さ迷い歩くと、音が聞こえた。

『カラン カラン』と端に付く音、綺麗な音色ドコロか、壊れた風鈴のような音が、遠い遠い耳の中に入り脳みそを揺らすように刺激した。

――壊れかけた……カラスの様だ……。――

休む間を与えずその鐘の音はしつこく鳴り響く。

『カランカランカランカランカランカランカランカラ
ン』

「だあ——！！！！！！
うるせえよっつー！！！！！！」

目が覚めた。

「わぁー！！！！！！」　ずっとカラスを鳴らしていた少年が、怒鳴り声で驚いた。

「うお——！！！！」

その叫び声で自身も驚いた。

「……大丈夫？」

「イヤイヤイヤお前がな……」

「うん 僕は平気」

「……ああそう」

今まで夢に誘われ心地良い眠りについていたのが、神保 絢斗それなりに頭も良く、それなりに喧嘩も強く、それなりに実家は金があり、十八になったら家の跡を継ぐため六代目襲名儀式を受けなければならぬ、一人暮らしの悩み大きい少年。

そして、カラスを鳴らしまくり絢斗を起こした少年が、神崎 愛。

母親の愛する自分の妹の名前が愛潤と言い、彼女を溺愛するあまり一文字取って自分の息子に愛と名付けられてしまった悲しい少年。未成年で、成長段階であるため、姿形は幼く中性的であるのが唯一の救いになっている。両親は世界を飛び回り、各国に資産ビルが幾つも存在する、世界有数の大金持ち。

「何？ これ」

絢斗が眠っていた机に置かれた紙切れを愛が拾い眺めた。

「ああ 机に入ってた」

「絢の？」

「んーん」

「誰にも言えない恋？ ……もしかしたら絢に恋してたりして」
からかい気味に笑う愛を無視してカウンター内へと逃げるように入っていく。それを、愛は面白そうに見つめるた。

「何か手伝おうか？」

客のいないこの店で働いてもいない人間が手伝う程のものでもない事を知っていて、この言葉を発する愛をみると、誰もが嫌味な性格の持ち主だと理解するだろう。

「無料働きで良いなら」

そして、嫌味には、嫌味で返せるのは絢斗だけだと誰もが知ってい

るのも、事実。

「攣れないな」

予想通りの返答と思わんばかりの笑顔を見せる。

「そら どーも」

愛の皮肉な返答に、絢斗は頭を下げるように御礼を言う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9344c/>

田中。

2011年1月15日20時59分発行